

【教育振興支援助成報告】

文学と芸術を通じた地域社会参画型表現教育プログラム (SEREAL)

和洋女子大学教育振興支援助成報告

小澤京子、佐藤淳一、間淵洋子、吉井美弥子、松崎夏実、
吉山さやか、小堀洋平、梅山聡、小野真嗣

Report on the Educational Development Program:
Socially Engaged Expression-Related Education of Arts and Literature

OZAWA Kyoko, SATO Junichi, MABUCHI Yoko, YOSHII Miyako,
MATSUZAKI Natsumi, YOSHIYAMA Sayaka, KOBORI Yohei, UMEYAMA Satoshi,
ONO Shinji

要旨

本教育振興プログラムは、日本文学文化学科の核である「文学、芸術、文化」を軸に、学生たちが表現や創作を通じて地域社会に参画し、協働・連携関係を築くための教育スキームの開発と実施が目的であった。さらに、地域社会の発展と課題の発見・解決に資する企画立案とその実践を、学生主導で遂行することを通して、従来、日本文学文化学科の各専攻・各教員がこれまで個別に実施してきた活動を統一的な理念と目的に基づいた総合的な制度に整備するためのものでもあった。

本稿では、本教育振興プログラムの目的と概要及びプログラムの着想に至った経緯や予測される効果を述べた上で、実際に実施された各プロジェクトの概要と成果を主担当者が報告し、さらに本教育振興プログラム全体の成果と課題について論じた。

キーワード：PBL、官学連携、地域社会参画、大学での学修成果の社会還元、学術研究活動の社会還元

1. はじめに

1.1. 本教育振興プログラムの目的と概要

本件「文学と芸術を通じた地域社会参画型表現教育プログラム (SEREAL)」の趣旨は、日本文学文化学科の核である「文学、芸術、文化」を軸に、学生たちが表現や創作を通じて地域社会に参画し、協働・連携関係を築くための教育スキームの開発と実施にあった。地域社会の発展と課題の発見・解決に資する企画立案とその実践を、学生主導で遂行することを通して、以下の五つのスキルの涵養を目標に据えた¹。

- (1) 「課題 (problem, question)」を見つけ出す能力
- (2) 企画力
- (3) 表現とデザインのスキル
- (4) 自らの考えを伝え、相手と対話的な関係を構築し、共通理解の地平を形成するコミュニケーション力

(5) マネジメント力

本プログラムは、日本文学文化学科の各専攻・各教員がこれまで個別に実施してきた活動（学生による表現を作品集にまとめる授業、地域に開かれた場での卒業制作展示、京成電鉄との産学連携、博物館学の知識を活かした地域連携など）も包括した上で、統一的な理念と目的に基づいた総合的な制度を整備するためのものである。あわせて、文学、芸術、文化の創造や実務の第一線で活躍する人物をゲスト講師として招き、学生たちに具体的事例に基づいた実践的な学修の機会を提供することも目的としていた。

上掲の目的を達成するために、本プログラムでは以下の三点を活動の支柱に据えた。

(1) 市川市を中心とする地域社会で文化事業や産業が抱える需要や課題を把握した上で、関係者との協働関係を構築しつつ、文学、芸術、文化という領域から、共通の目的を達成するプログラムを統括的に制度化する。

(2) 学生の表現活動を作品集や展示、上演として完成させ、地域社会に向けて発表、あるいは販売する機会を設け、定例化する。その際に、作品や表現の内容だけではなく、学生たちが自ら「観客」や「市場」について調査し、戦略を定めて企画立案し、さらに作品発表後の反応をフィードバックとして分析し、省察を行うというプロセスを重視する²。

(3) 文学、芸術、文化に関わる創造・制作や実務の第一線で活躍する人物を招いたワークショップやレクチャーを、授業と課外活動の双方で開催する。

1.2. 本プログラムの着想に至った経緯（問題意識）と予測される効果

これまで本学科では、地域連携プログラム、表現教育、課題解決型学習（PBL）、文化施設や企業との協働などは、各専攻や各教員による個別の取り組みに一任されており、学科内で共通の理念や目標が掲げられることもなく、実施のノウハウも共有されないままという、非効率的な状況にあった。また、それぞれの取り組みの成果を事後的に測定して共有し、教育改善へとフィードバックする仕組みもなかった。

さらに、本学科の学生たちには、内向的で自己効力感が低く、積極性や行動力が同世代に比べて脆弱であり、未知の領域への好奇心も弱いという傾向があり、教職員間でも問題として指摘する声が頻繁に上っていた。このような学生たちの心性の背景として、未知の相手とのコミュニケーションや関係構築に対する不安が強いこと、大学で学ぶ知識を社会のなかでいかに応用・展開しうるのか実感しづらいこと、社会経験や成功経験（あるいは挫折を乗り越えた経験）の蓄積が年齢に比して少ないことなどが推察された。本プログラムを構想した2019年度当時、本学科では解決すべき課題として、学生たちの意欲と学修効果の低迷、就職活動への出遅れと苦戦、就職後のミスマッチなどを抱えていたが、これらもまた前述した諸問題の帰結である³。その解決のためには、個別の授業や個々の教員による努力を超えて、学科全体で大学での学修と社会参画とを架橋する仕組みを構築することが必要であった。

このような問題意識と需要のもとに構想されたのが、文学と芸術という学科の専門の学びを通して、学生たち自身による表現を促し、それを地域社会への参画や市民との協働へとつなげることを主眼とする本プログラムである。取り組み後に期待される効果としては、以下の諸点を想定していた。

(1) 表現教育や地域連携・産学協同プロジェクト、PBLを共通の理念と目的の下に統合し、体系的な制度設計を行うことで、効率化と個々のプログラム間のシナジー効果を実現し、学修成果の測定と分析を行い、学科全体の教育改善に資することが可能となる。

(2) 学生自らが企画立案し、協働作業のなかでリーダーシップとフォロワーシップを発揮しながら、期限内に成果を出して社会に公表し、その結果について責任をとるプロセスを経験し、他者から評価や感

謝を得ることを通して、社会のなかで成熟した職業人として生きていくための基礎的・汎用的能力と、モチベーションや行動力の基礎となる自己効力感を養うことが期待できる。 【第1章文責：小澤京子】

2. 各プロジェクトの概要と成果

本教育振興プログラムは、日本文学文化学科のアーリーキャリア教員（本学着任10年未満）たちの主導によって進められた。具体的なプログラム・メンバー（研究員）は、梅山聡、大塚千紗子、小澤京子（2020～21年度研究代表）、小野真嗣（2022年度研究代表）、木村尚志、小堀洋平、佐藤淳一、仁藤潤、間淵洋子、湯澤聡、吉井美弥子、吉山さやかである。3年間のプログラム期間中に実施したプロジェクトのうち、主要なものの概要と成果を以下に記述する。

2.1. 市川駅南口図書館との連携による図書POP展示（PBL、官学連携、地域社会参画）

本プログラムの皮切りとなったプロジェクトが、市川駅南口図書館（以下「駅南図書館」）との連携企画「中高生にすすめる一冊」POP展示である。本プロジェクトは、中高生の「活字離れ」問題の解決を目的とするもので、1年生から4年生まで計33名の学生が参加、2021年3月2日～4月29日の期間に、駅南図書館にてPOP38点の展示を実現させた【図1】。この展示の好評を受け、2022年度にも「中高生にすすめる一冊」POP企画第2弾を実施、2023年4月1日～5月7日まで駅南図書館にて展示を行った。



【図1】「中高生にすすめる一冊」駅南図書館展示

本プロジェクトの経過は、次のようなものである。まずは当該教育振興プログラムの連携先を模索するところから始まった。本学の地域連携センターより、すでに他学部と連携関係を構築していた駅南図書館の館長・宮野源太郎氏の紹介を受け、本学科との協働につき協議を進めた。その過程で挙げたのが、学生による選書と来館者に読書を促すメディア（POP、フリーペーパー、ポスター等）の制作、「文学散歩マップ」の作成と頒布、いくつかの授業（図書館サービスに関する司書課程科目、文学作品の翻案を扱うクリエイティブ・ライティング科目など）との連携というプロジェクト案である。これらの企画のそれぞれを、プログラム参加教員で分担し進めることとなった。そのなかでも、COVID-19による行動制限下でも実施

可能で、活動時期も融通の利く「学生による選書とPOP制作」案を、まずは2020年12月から本格的に稼働させた。

2020年度は行動制限が厳格であり、対面集会も原則禁止であったため、プロジェクト参加者間のやりとりはすべてオンラインに集約し、SlackとZoomを活用して連絡や協議、情報共有を行った。時間と場所の制約から解放されたことで、むしろ従来以上に効率的かつ精緻なコミュニケーションが可能となった(そのため、この方式を2022年度のPOP企画第2弾でも踏襲している)。2020年度、22年度とも、参加学生の全員をSlackのグループに登録し、まずは学生個々の選書案、ついでPOPの文案とデザイン案を共有し、学生どうして意見交換、適宜教員や図書館長が助言を行うという方式でプロジェクトを進めた。

この「中高生にすすめる一冊」POP企画は、この教育振興プログラムの実践第1弾であり、また「市民に読書の楽しさを伝える」という目的からも、地域住民への周知、とりわけターゲット層である中高生とその保護者へのリーチが重要であった。そのため、学生たちも交えて、広報活動を戦略的に展開すべく案を練った。本学の公式ウェブサイトでの発信(「学科トピックス」を4回掲載)に加え、告知用ポスターとフライヤーを作成し、千葉県を中心とするローカルメディア『ちいき新聞』市川・八幡・西船橋エリア版への封入、市川駅前でのポスター掲示、市内と近郊の高校や公的機関への送付等を行った。また『ちいき新聞』と『市川よみうり』の取材を受け、二紙にイベント紹介と参加学生のインタビュー記事が掲載された⁴。

つづいて、本プロジェクトの成果を概括したい。まずは学生たちが、地域社会の公共機関と協働する経験、社会の課題に対して共同で解決策を考え実行する経験、特定ターゲットに向けた効果的なプレゼンテーションを、文章と視覚的表現の双方を組み合わせ工夫する経験、中高生を指導する視点のシミュレーション、図書館スタッフや地域メディア記者ら「初対面の大人」とコミュニケーションをとる経験、自発的に選択し、行動し、期日までに成果を出すという成功経験を、心理的な安全性も担保された空間で蓄積できたことが挙げられる。

さらには、COVID-19という突発的事情によりさまざまな制約が課されるなか、学生たちで協力し合いながら自主的に解決策を考え、分担して作業を進め、プロジェクトを期日までに実現させることを通して、問題解決能力、企画力、プロジェクトマネジメントのノウハウ、リーダーシップとフォロワーシップ、広義のコミュニケーションスキル、調整能力、事務処理能力、さらにはICTツール活用のスキルとリテラシーを鍛錬することができた。なによりも、「自分の好きなこと、得意なこと」で表現を行い、地域社会に向けて発信することで、図書館長と地域住民をはじめ多様な第三者から評価と承認を得た経験は、学生たちの自信と自己効力感につながったはずである。エピソード・ベースの評価になるが、プロジェクト内でリーダーシップや積極性を発揮した学生は、その後も学業成績や課外活動、将来のキャリア構築へ向けた取り組み等において優秀な成果を挙げ、また他の学生をリードする役割も担う傾向が強いことも確認できている。

反省点としては、本プロジェクトに対する参加学生と地域住民からのフィードバックの回路を、制度として明確に設定していなかったこと、そのために、統計的な根拠に基づいた(つまり「エヴィデンス・ベース」の)効果測定と評価づけを实践できなかったことが挙げられる。 【第2章第1節文責：小澤京子】

2.2 『市川文学散歩』(PBL、官学連携、地域社会参画)

2021年4月に市川文学散歩の企画案を立ち上げ、本学の教育管理システム(LMS) manaba courseにて学生募集を行った。具体的な内容は以下のとおりである。

- ・市川市(を中心とする千葉地域)を舞台とする文学を取り上げ、イラスト入りマップや小冊子、ウェブ

コンテンツなどを制作する。

- ・「市川文学散歩マップ」、「写真・イラスト付の簡単な解説文を掲載した小冊子」や専用アプリなども作成する（具体的なことは参加メンバーで協議し決める）。
- ・2021年8・9月に最初の成果を公表する（紙媒体マップの完成、リーフレットなど）。

コロナ禍の中での運営となったのでコミュニケーションツールのSlackを活用することとした。また適宜、Zoomを使用することとし、大学側の活動指針に従う形で対面での打ち合わせを試みることにした。

2021年4月21日にZoomにて学生主体の第1回ミーティングが行われた。紙媒体のマップ（QRコード、タイムスリップ地図リーフレット添付検討）の作成、Twitter（現「X」）・Instagramの開設、アプリの開発や連動する企画などについての意見が出たほか、この企画のターゲット層、取り上げる題材、扱う地域、作業班など話し合われた。（参加できなかった学生にはSlackでの情報共有を行った。またこの後も教員からの情報提供は適宜Slackを通じて実行した。）

5月9日に第2回ミーティングを開催した。市川駅南口図書館との渉外担当を決め（学生2名）、宮野源太郎氏、松本浩和氏、桂小すみ氏への企画のプレゼンを五月末に行った。

この後、数回のミーティング（6月6・30日、7月12日）を行い、紹介作品の検討を行った。続いてデザインに関するアイデア出しを行い、冊子・展示物の制作を開始した。教員がチェックした上で、印刷業者で印刷製本を行った。制作した冊子の内容は、「書誌情報、所蔵館、あらすじ」を記し、「市川がどのように取り上げられているか」解説をしたものである。一つの作品につき400～600字で表現した。取り上げた主な作品は以下のとおりである。『定本古泉千櫨全歌集』、中野孝次『麦熟るる日に』、『岡本太郎の眼』、『国府台戦記』、司馬遼太郎『花神』『燃えよ剣』、武藤村石『俺たちの戦いはこれからだ』、乃南アサ『風の墓碑銘』、内田康夫『中央構造帯』、桐野夏生『メタボラ』、宮部みゆき『楽園』、京極夏彦『邪魅の雫』。

完成した冊子【図2】は、市川駅南口図書館、南行徳図書館平田図書館、信篤図書館、行徳図書館、市川市文学ミュージアム、市川市中央図書館や京成線市川近郊の駅で配布を行った。2021年8月からは市川駅南口図書館にて、取り上げた「作品紹介POPの展示」や「市川文学散歩地図の展示」を行った【図3】。冊子は、近隣の中学や高校に送付し、オープンキャンパスなどでも配布を行った。



【図2】『市川文学散歩』冊子



【図3】「市川文学散歩」駅南図書館展示

本企画の特徴としては、学生の主体性を重視したこと、また地域社会との連携を学生に意識付けることを重視した事があげられる。以前からある市川文学MAPとの差異化を図ることを目的とすることで、学生から今までに取り上げられてこなかったような現代の作品や作家（狭義の文学以外のもの含む）が紹介されることになった。これは上記のプレゼンを通じて学外の方からの助言を踏まえた結果でもある。この意味で、学生の自主性の育成という目的を果たすことができたと考えている。

今後の課題としては、類似した地域社会参画型の表現教育を継続していくこと、また参加者を増やすことなどがあげられるだろう。同年の1年生向けの日文セミナーにおいて「市川文学散歩」をテーマとしたことなど、学科内においてもこの企画と連動させることの試みは継続して行っているが、学生の自主的な参加を中軸とした活動であるだけに、継続を維持しさらに充実したものにしていくことはなお課題として残っている。

参加した学生にとっては、ミーティングの準備や運営、外部との連携や一般の方へ向けた発信などはじめて学ぶことが多い活動であったと考えられる。日本文学文化学科の学生は総じて文学や芸術を愛好しているものが多いが、他方で社会活動とのつながりが弱い学生も少なくない。学科としては文学や芸術の学びと地域社会での様々な実践の橋渡しとなるような試みをこれからも提案し続けていくことが必要であろう。

参加した各教員の役割分担は以下のとおりである。小澤：プロジェクト総括、渉外担当学生指導、会計責任者、制作物コンプライアンス・チェック、佐藤淳一：作品選択指導、紙媒体制作指導、小堀：作品選択指導、紙媒体制作指導、吉山：紙媒体制作指導、間淵：作品選択指導、大塚：作品選択指導、紙媒体制作指導、パブリシティ指導。外部協力者：宮野源太郎氏、松本浩和氏、桂小すみ氏。

【第2章第2節文責：佐藤淳一】

2.3. SEREAL ウェブサイト構築（PBL、地域社会参画、情報・ICTリテラシー）

『市川文学散歩』の企画・立案に際して、印刷物の作成、図書館での展示等に加えて、インターネットを活用した広範な情報・成果発信活動の展開を試みることにし、①専用ウェブサイト⁵の構築・運営、②SNS（Twitter⁶；現「X」、およびInstagram⁷）での情報発信を行った。いずれも学生主体の活動であり、この活動を通して、ウェブサイト構築にかかる知識技能の習得のほか、インターネット上で情報発信を行う上でのリスク管理等を含めた総合的なITリテラシーの涵養、および、画像と文章を駆使した表現力・発信力の向上を目指した。

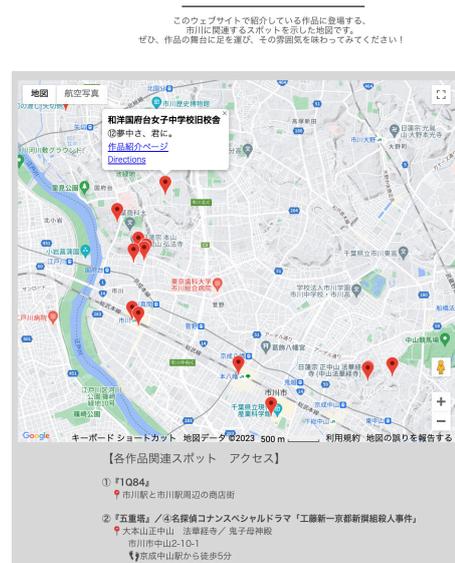
2021年6月より着手した専用ウェブサイトの構築・運営にあたった学生は、有志で集まった4年生1名、3年生2名、2年生2名の計5名で、サイト構築の経験や知識のある者はいなかった。サイトの公開期日を市川駅南口図書館での展示日程に合わせて2021年7月末日と定めていたため、限られた期間で円滑にプロジェクトを推進する工夫が必要であり、学生自身が容易に構築・運営できるプラットフォームを選定すること、適材適所、得意な分野で活動できるよう作業分担をすること、グループリーダーを決めて作業分担・進捗確認等のマネジメントを確実に行うことの3点が、その重要なファクターとなった。

サイト構築のプラットフォームには、無料で利用可能なホームページ作成ツールWix（<https://ja.wix.com>）を用いた。クラウドベースで運用できサーバは不要、直感的な操作で簡単にウェブサイトを作成できる上に、多様な用途に合わせた多彩なテンプレート、SNS連携（サイトへのSNS投稿の埋め込み）、レスポンスデザイン（デバイスに応じた最適表示機能を有するウェブデザイン）への対応など、機能性にも優れる。グループリーダーを中心に、SlackやZoomを活用しながらコンテンツ、サイト構成（サイトマップ）、ページデザインなどの検討を進め、1から学生たちが作り上げたサイトが2021年8月1日に公開された。

サイトのコンテンツは、『市川文学散歩』の冊子体収録作とは異なる14作品（文学8作品、テレビドラマ等5作品）の紹介【図4】を中心に、Googleマップのマイマップ（任意のポイントを付けた独自設定の地図）機能を用いた文学散歩地図【図5】、市川駅南口図書館での展示イベント紹介、『市川文学散歩』冊子体データのダウンロードリンク、SNS連携などである。ウェブの特性を活かし、実際の作品にアクセスするための情報（市川駅南口図書館の配架情報や作品公式サイトへのリンク等）を含む、作品関連情報を豊富に有している点、写真やイラストを効果的に用い、文章のレイアウトやフォント、カラーユニバーサルデザイン等の視覚的アピールに関しても十分な検討の上に構築されている点が、本サイトの特長と言える。



【図4】「市川文学散歩」ウェブサイト



【図5】サイト上の文学散歩地図

このプロジェクトを通じて、参加学生はウェブサイトの仕組みや構造を理解し、構築・運用のスキルを獲得することができた。また、利用者を意識したウェブデザインのさまざまな要素に目を向ける契機ともなり、結果として総合的なITリテラシーも涵養することができたものと思われる。また、学生にとって、全く未経験であった分野において、メンバーと協働して一定の成果を達成できたことは、大きな自信につながったはずである。ことに、グループリーダー（3年生）に関しては、協働プロジェクトにおけるマネジメントの難しさを実感すると同時に、上級生・下級生を含むグループに対する適切なコミュニケーションと分担調整について、積極的に試行錯誤を重ねたことで、自らがリーダーシップを発揮しプロジェクトを成功に導くことができたという成功体験になったという。

一方、課題としては、一連の『市川文学散歩』プロジェクトが収束した後、サイト運営活動を継続できなかったことが挙げられる。学生は、有志でプロジェクトの活動に参加しているため、年度やプロジェクトの活動時期・内容によって参加者は変化し、卒業する学生もいる。継続的に活動することに困難があり、担当者が獲得したウェブサイト構築・運営のスキルを活かすこと、継承することができていない点については、今後のありかたを検討する必要がある。

【第2章第3節文責：間淵洋子】

2.4. 「#この本いいね」(PBL、官学連携、地域社会参画)

標題の企画についての経過と成果の報告は、すでに「「#この本いいね」を通じて～「図書館サービス特論」実践報告～」と題して『フォリオ 和洋女子大学司書課程・司書教諭課程年報』第4号(2021年度)、2022年3月刊行に寄稿しているため、本稿では、その概要を述べ、前掲脱稿後もさらに継続して展開した成果についての報告をしたい。

本企画は吉井が担当した司書課程の「図書館サービス特論」(旧カリキュラム科目)の授業において実施したものである。授業では、シラバスで示したとおり、学生たちはまず、図書館サービスの現状調査報告をした。その後、「公共図書館サービスの具体的な実践として、市川駅南口図書館(以下、「駅南図書館」の通称を用いる)と連携しイベントの企画を立案し実施すること」に取り組んだ。

以下、取り組みの経過について述べていく。まず、駅南図書館との連携企画とその実施方法について、学生たちはさまざまなアイデアを意欲的に出し合って丁寧な検討を重ねた。その結果、来館者参加型によるTwitter(現「X」)風ポップを展示する企画「#この本いいね」を実施することに決定。「本離れ」の傾向が見られるという中高生に、ぜひ読んでほしいと思う本を学生たちが選んでポップを作製し、来館者参加型によって展示するという企画である。デジタル世代ならではの発想と来館者参加型というアナログな 방식을柔軟に融合させたユニークな企画となった。紹介する資料(本)選びに際しては司書課程・司書教諭課程で学ぶ学生有志の協力を得た。ポップの文案は授業履修者で検討を重ねて作製。告知用のチラシ、ポスターやポップのフォーマット等の各デザインについても皆で出し合った意見を活かしつつ、文化芸術専攻4年生が作製し、プロ顔負けの見事な仕上がりとなった。この授業はCOVID-19による行動制限下の2021年度後期の開講であったため、学内での作業は一日だけに限り、あとはZoomを活用して実施した。告知チラシの案内文は以下のとおり。

本を読む楽しさから遠ざかっている#中高生の皆さんへ、#読書の魅力を思い出させる本をリストアップし、#SNS風ポップでご紹介します！ 読後はもちろん、読む前にも「いいね」と思った本のポップにシールを貼っていただく#参加型の企画！ 本好きな中高生の皆さんにも、普段読まない本と出会う機会になるでしょう。幅広い世代の皆さんに楽しんでいただける企画ですので、ご来館をお待ちしております。

宮野源太郎館長をはじめ駅南図書館の皆様のご尽力により、2021年12月1日から2022年1月10日までの本企画は、好評のうちに会期を終えた【図6】。紹介した本は大いに貸し出されたとのこと。来館者にハート型のシール(世代別に色分けしたものを準備)を貼ってもらったり、「リプライ」風に一言を付箋に書いてもらったりしたことで、会期中から来館者のリアルな反応を知ることができたのは、学生にとって貴重な経験となった。中高生のみならず一般の方たちも積極的にご参加くださっていたことも窺え、参加型企画にしたことの手応えを学生たちと実感するとともに、本企画の実現にご協力くださった多くの皆様への感謝の思いを強くした次第である。

その後、3名の学生が前掲『フォリオ 和洋女子大学司書課程・司書教諭課程年報』第4号へ、この取り組みの報告を寄稿してくれたことも学修の成果として実に喜ばしいことであった。併せてお読みいただきたい。その報告からも、学生たちが本企画を通じて課題を協同して解決していくことを学び、地域連携の意義を体感したことが看取される。なお、この企画に関わった学生のうち2名は長年の夢を実現して、卒業後、司書職に就くことができた。大学での学びを社会で存分に活かしてくれることが期待される。

図書館での会期終了後も本企画は展開を継続した。展示したポップを回収した後、学生たちからこのまま終わらせるのは惜しいとの声があがったことを受け、この機会にポップの文章をまとめた「読書案内」の小冊子を作製することとした。表紙は会期用に作ったポスターをもとにし、駅南図書館での展示風景の写真や学生の感想等も掲載した【図7】。デジタル入稿の際には学科付職員の松崎夏実氏のお世話になった。改めて御礼申し上げる。

完成した小冊子（A6判22頁、フルカラー、2022年2月22日発行）は学内で学生に配布することはもとより、駅南図書館でも設置をお願いし配布していただいた。また、近隣の中学校や高校へも送付した。さらに、オープンキャンパスや2022年夏の文学フリマ会場でも配布した（2023年夏の文学フリマ会場においても継続して配布）。一方、Twitter風ポップをもととしていた特色を活かし、実際にその後Twitter（現「X」）上にも掲載している。

以上、本企画の多角的な展開は、SEREALの目標とする学生の学びの充実、地域社会との連携に加え、本学の取り組みの成果を学外へと広報するための絶好の機会となった。【第2章第4節文責：吉井美弥子】



【図6】「#この本いいね」駅南図書館展示



【図7】「#この本いいね」小冊子

2.5. 『平安朝文学と翻案——比較研究と創作——』（PBL、地域社会参画）

『平安朝文学と翻案——比較研究と創作——』は、吉井が担当した2021年度後期開講科目「日本語表現創作特殊演習Ⅱ」の授業を履修した学生たち26名の成果を冊子にまとめたものである。以下、取り組みの経過と成果について報告する。

吉井は『源氏物語』をはじめとする平安朝文学を研究の対象としており、平安朝文学の享受の問題も関心を持って取り組んでいる研究テーマの一つである。そこで、この授業では、①平安朝文学が現代文学・現代文化の中にどのように享受されて翻案作品として立ち現れているか、その特色と意義を探るべく自ら対象作品を選んで比較研究すること、あるいは平安朝文学の二次創作を自ら手がけること、のどちらかを選択し資料を作って発表する、②授業内で意見交換して理解と考察を深める、③最終的には文章化する、以上を授業の目標として掲げた。コロナ禍に収束の見えない時期の開講であったため、授業はすべてZoomミーティングによって実施した。履修者は日本文学文化学科日本文学専攻と文化芸術専攻に在籍する3～4年生であった。

授業では、最初の数回でこの授業のねらいを説明するとともに、『源氏物語』をはじめとする平安朝文学とその翻案作品の具体的な紹介と分析例を示した。その後、毎週2～3名の担当者が自分の取り組むテ-

マについて資料を作成した上で発表する。学生が取り扱おうとしている平安朝文学についての解説を教員が補足した上で、学生の発表した内容について履修者が意見や感想を述べ合うことで理解を深めていったり、良いアイデアを出し合ったりするという方式をとった。それをもとに学生たちは各自の関心にそって「比較研究」あるいは「創作」を試みて文章化したものを期末課題として提出した。その結果、研究的アプローチとしては文学のみにとどまらない翻案作品（アニメ、映画やゲーム等までも含む）についての多様な比較考察が試みられ、また、自由かつ柔軟な発想によるさまざまな翻案小説が創作された。

課題提出が完了した後は、冊子にまとめるべく、学生の原稿に教員がいささかの加筆修正を施し、また、この冊子全体のイメージを表す表紙の構図案を考えた。この原案をもとに、表紙デザインは学科付職員の松崎夏実氏（本学科文化芸術専攻卒業生）がたいへん美しく作ってくださった。なお、裏表紙は本学科日本文学専攻卒業生の描いたイラストを本人の許可のもとに用いることができた。印刷所へのデジタル入稿時にはまた松崎氏に大にお世話になった。記して謝意を表す。

完成した冊子（A5判84頁、2022年5月15日発行）【図8】は、併設校への寄贈およびオープンキャンパスでの配布のほか、2022年夏の「文学フリマ」へ出店した際には有料で販売し（1冊100円）、好評であった。出店前の準備としては、ブース用ポスター【図9】や名刺風カード等を学生たちが松崎氏と協力して作製し、告知にはSEREALのTwitter（現「X」）を活用して大学院日本文学専攻修士課程2年生がその文案を作製してくれた。Twitter関連についても松崎氏と本学科の小澤京子教授の助力を得た。文学フリマ当日は、前出の大学院生とともに本冊子に執筆している学生2名、そして本学科の間淵洋子准教授が設営や販売等に携わってくださった。本冊子は、2023年夏の文学フリマでも継続して販売し、この折には学科付職員の小倉彩氏、柴原麻衣氏（いずれも本学科卒業生）の助力を得た。

実技系の学びの成果を発表する場や機会があることに比べると、文学系の学びの成果を目に見える形にして発表する場や機会を設けることは残念ながらなかなかむずかしい。本企画は、そうした文学系の学びを冊子という形にすることで、学生たち自身が学修の確かな成果を確認できる良い機会になったと確信している。また、翌年度の同授業でこの冊子を手にした後輩の学生たちにもたいへん良い刺激になっていた。

本企画が、文学フリマをはじめとした社会への発信にもつながり、オープンキャンパスなどでは広報的な役割を担うことができていることも成果として報告しておきたい。【第2章第5節文責：吉井美弥子】



【図8】『平安朝文学と翻案』冊子



【図9】文学フリマ東京34ポスター

2.6. 「かつうら朝空マーケット×和洋女子大学 日本文学文化学科」(PBL、官学連携、地域社会参画)

2022年6月10日に千葉県勝浦市と連携して実施された作品展示及びワークショップ企画である「かつうら朝空マーケット×和洋女子大学 日本文学文化学科」について報告する。「かつうら朝空マーケット」とは、勝浦市が地域活性化を目的とし朝市と連動して実施している月例イベントで、本学科の卒業生が市の観光商工課へ勤めていることをきっかけに出展が実現した。企画は出展者側で自由に図ることができたのだが、これまで実施経験の少ない体験型ワークショップの組み込みを試みた。アートを通じて町おこしができないだろうかという課の要望と、大学で獲得した知識や技術を活用しアートコミュニケーションを実践したいという本学科との双方の目的が合致したことによって成立した企画である。

企画は小野・松崎が担当し、文化芸術専攻の学生を中心に、イベント当日の運営スタッフ5名、展示作品の出品やシルクスクリーンのデザイン案提供、スクリーンの制作陣を含めると20名以上の学生の参加があった。イベントの実施環境は、勝浦駅近くの商店街に市が管理している貸しスペースがあり、通例の「かつうら朝空マーケット」でもそこで体験型のワークショップなどが行われている。その近辺に朝市やキッチンカーが並び、主に朝から昼にかけてがピークタイムで、本企画も朝の9時から12時と、限られた時間の中での実施であった。

今回の出展内容としては大きく分けて二つで、一つは学生が授業で制作した絵画等の作品30点程度の展示、もう一つは同じく大学で学んだ版画技術であるシルクスクリーン技法⁸を使った無料体験ワークショップである。ワークショップの形式としては、予め参加人数や開始時間を決めて実施するものではなく、もともと目的としていない来場者でもふらりと立ち寄れるよう、予約は不要で体験にかかる所要時間も20分程度と設定し、技術的・心理的に構えることなく参加ができるような企画を目指した。市民にとって、すでに地元根付いている食品産業や自然資源を活用した環境産業に比べ、アートや文化芸術に対する意識やその活用といった普及率が低いという現地の職員の認識があったため、出展内容の規模感や熱量は特に学生と吟味した点である。

結果として、総来場者数は「かつうら朝空マーケット」が過去に実施したモノづくり系のワークショップの中で最も多いレベルの客入りであり、トートバックやTシャツ等のシルクスクリーン用の在庫30点はすべて捌けてしまい、現地で素材を買い足すほどの盛況ぶりであった。開始直後は、学生の接客や運営も多少緊張とぎこちなさがあったが、人の流れの勢いも相まってか早々にその場の空気に慣れ、来場者と雑談を交えながらこやかに対応しつつ手元の作業もみるみる効率的な動きへとなり、在庫がなくなった際には大きな達成感を得られたことと思う。特に文化芸術専攻では本企画のほかにも、国際アートイベント「DESIGN FESTA」【図10】への出展や外部ギャラリーでの卒業制作展の実施等、学外での表現・発表活動を重要視して実践してきたが、今回の企画の特質として、協働的なワークショップや自身の作品を介しての鑑賞活動を通し、学生と来場者とがより近い距離で具体的な対話やコミュニケーションを交わすことが可能であった点にある。双方向による対話があることで、来場者にとっては人を通じて文化芸術を体験するきっかけが生まれ、我々にとっては自身が培ってきた知識や技術、経験が大学の外でも通じるという自信につながるものとなったのではないだろうか。

さらに今回の成果として、参加した学生が成功体験を自覚しながらも、ブースの導線やワークショップの運営方法、シルクスクリーンの技術的な課題点など、すぐさま企画内容を分析して振り返り、今後の引き継ぎとして資料にまとめるなど、その場限りの体験として終わらせることなく、その企画を後継すべきものとして客観的に捉えてくれていたことに大きな意義を感じた⁹。このように、正課の授業以外での活動が単に消費的な活動でなく、自己の受容やステップアップ、所属するコミュニティの発展につながると

いう認識を持つことが、今後の活動における学生の学びをより有益なものとするだろう。

【第2章第6節文責：松崎夏実】



【図10】学生制作のデザインフェスタポスター

2.7. 書道作品としても見られる本の紹介POP（PBL、官学連携、地域社会参画）

2022年度に実施した本企画は、吉山が担当した中学校国語科教職課程必修科目である「書写Ⅰ、書写Ⅱ」の履修の学生が中心となり、小中高生を対象におすすめる本の紹介POP制作である。

「書道作品としても見られる本の紹介POP」をねらいとして、書写書道の学修の成果をPOPの文字に活かすべく、毛筆は必ず使用して制作するよう指導した【図11】。また、国語科との連動した学びの一環とし、PBLの取り組みを通して、国語科教員としての指導力を養うことを目的とした。さらにその成果を地域社会に公開し、読書活動の推進に貢献できるようなPOP制作を心掛けて取り組んだ。

2022年4月に本企画を立案。教育振興プログラムSEREALとのタイアップ企画として、市川市内で連携できる施設を検討した。これまで実施経験のある市川駅南口図書館長・宮野源太郎氏をご快諾くださり、企画実現の運びとなった。



【図11】書道を活かしたPOP

宮野氏と協議の結果、POPのテーマは「書道作品としても見られる本の紹介POP」に決定した。会期は2022年7月30日～9月4日となり、夏休み期間中でもあることから小中高生に向けての企画とした。本のジャンルは、ミステリー、ファンタジー、小説、エッセイなど、特に選書の指定は設けず、学生が選書する基準を尊重した。また、履修者同士重複した場合でも可とした。展示は、制作点数が40点を超えていたため、会期中に入れ替えをすることとし、POPに市川市内図書館の所蔵情報を添付することにより、市川駅南口図書館で未所蔵の場合でも案内できる形をとった。

2022年度はCOVID-19の影響で、書写Ⅰ・書写Ⅱの全ての回の面接授業が叶わず、1/2登校の形で授業を実施した関係で、A・Bクラスに分け、【表1】のとおりそれぞれの日程を組み、計画を立案した。基本的には、遠隔授業回で個人の作業を進行し、その確認を面接授業時に行う形で進めた。原稿の確認、意見交換、情報共有、予定の調整等では、manaba courseやSlackを使用し、タイムリー且つ円滑に進行できるようICTツールを活用した。

【表1】

Aクラス			Bクラス		
5/30 (月)	概要説明	本を選ぶ POPに書く内容を考える	5/23 (月)	概要説明	本を選ぶ POPに書く内容を考える
～6/13 (月)	原稿提出 (最終確認)		～6/13 (月)	データ原稿提出 (最終確認)	
～6/27 (月)	原稿返却	下書きする	～6/20 (月)	原稿返却	下書きする
～7/11 (月)	下書き提出	レイアウトを考える	～7/4 (月)	下書き提出	レイアウトを考える
7/19 (火)～21 (木)	書道準備室前のボックスに提出	清書	7/19 (火)～21 (木)	書道準備室前のボックスに提出	清書

まず、選書案を確認するとともに、文案の確認を行った。校閲については、教員のほか、中学校・高等学校国語科教職課程を履修の3年生4名、2年生2名、計6名の校閲チームを結成し、全体としては4回にわたり助言にあたった。文字については楷書、行書を基本とし教員が指導した。デザインについては、学生同士意見交換させる場を設け検討した。ポスター、展示タイトル・企画の趣旨パネルについては、学生自らが制作した。いくつかの案を提示し、制作における意図についてプレゼンテーションを行い、意見交換の上決定した。広報の方法については、審議の上、ポスター掲示のほか、目につきやすく情報を拡散しやすいTwitter（現「X」）を使用することに決定し、その発信を学生主動となって行った。

結果的に44点のPOPが完成し、展示タイトル、企画の趣旨パネルとともに7月26日に学生が図書館に納品し、展示や撤去における確認や打ち合わせを行った。

本企画を通してPBLの取り組みを行ったことがきっかけとなり、履修者同士のコミュニケーションが円滑にとれ目標の達成につながったと感じる。また、学生個々のポテンシャルも高く、前向きであったことが良点と言える。ただし、COVID-19の流行の影響で現地に足を運ぶ機会が少なかったこともあり、来館者や館関係者からのフィードバックに対する十分な調査ができなかったことが反省点である。今後に活かしていきたい。

【第2章第7節文責：吉山さやか】

2.8. 学生レクチャー「近現代詩の魅力をさぐる」(PBL、産学連携、地域連携・生涯学習)

学生レクチャー「近現代詩の魅力をさぐる」は、和洋文学講座の特別企画として実施された。和洋文学講座は、本学と市進ホールディングスの連携事業として、同社の運営する「大人の学び舎大黒家」で2022年度に連続開講された市民向け講座で、2023年度からは和洋文化講座と改称の上、大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォームの事業に引き継がれている。22年度の講座は、日本文学文化学科

日本文学専攻の教員が講師を担当して全8回にわたって実施されたが、そのなかで特別に学生によるレクチャーを行ったのが、本講座「近現代詩の魅力さをさぐる」である。

本講座は、2022年11月26日13時30分から15時にかけて、「大人の学び舎大黒家」にて開催された【図12】。企画担当教員の小堀による趣旨説明の後、6名の学生が各10～15分程度のレクチャーを行った。全体の内容は、詩における言葉と思想という大きな視点から近現代における抒情の系譜をたどり、一つ一つの作品の読みどころを分析するというものである。各学生の発表タイトルは以下のとおりである。

- ①「武者小路実篤「亀の如し」における「あきらめの隠れ家」——「進む」先に目指すもの——」
- ②「矢野目源一「哀歌」における過去と現在」
- ③「矢野目源一「明るき時」における「私」と「恋人」——表現から二人のひと時を見る——」
- ④「田中冬二「四月の雨」における〈表現〉——独特な世界観を読む——」
- ⑤「萩原朔太郎の描いた「田舎」イメージ」
- ⑥「萩原朔太郎「蛙の死」における蛙のイメージについて」



【図12】大黒家和洋文学講座学生レクチャー

受講者に関しては、定員9名に対して申込み4名、参加2名と、人数の確保に課題を残したものの、受講後のアンケートでは以下のように肯定的な評価を得ることができた。

- 【内容】大いに楽しめた1 普通1 【声の大きさ】適正2
 【わかり易さ】わかりやすい1 普通1 【雰囲気】とても親しみやすい1 普通1

自由記述でも、以下のような好意的な意見が目立った。

- ・学生さんたちはとてもよく作品について調べていて、聴いている私も興味が持てました。現代詩については日頃あまり関心もたれていないようですが、あらためて詩の世界の深さ、面白さを感じました。このような良い機会なのに参加者が少ないのは残念です。
- ・日頃の研究成果を拝聴する機会を頂き有難うございました。私自身が古い文学に接する機会を得られたことと、これからも若い方たちにも未永く日本の文学への思いを強く持って頂きたく思います。なお、本講座の内容は、実施後に大黒家ホームページの講座紹介にも掲載され、SREALの活動を一般

向けに広報する一助にもなった。

本企画の教育的効果については、次のとおりである。本企画の参加学生は、小堀が担当する科目の履修者から成る。その内訳は、「基礎ゼミ」4名(1年生)、「日本文学特殊講義Ⅱ」2名(3年生)である。講座での学生のレクチャー内容は、1年生に関しては授業内でのプレゼンテーションを発展させたもの、3年生に関しては講義を聴いて特に関心をもった点について、自主的に調査・研究を行って準備したものである。発表内容については、事前に担当教員が指導し、数次にわたる資料の添削を実施した。また、教員による和洋文学講座(吉井美弥子教授「紫式部の謎」(10月10日)および間淵洋子准教授「文学の言葉を科学する——AIで読む文学の中の「市川」」(10月22日))を見学し、現地でのリハーサルを行った。このようなプロセスを経て、学生たちには近現代詩を中心とする文学テキストの分析方法への習熟とともに、プレゼンテーション能力の向上が見られた。

おわりに、本企画は2023年7月22日実施の和洋文化講座学生レクチャー「市川の詩人宗左近を学生と読む」に引き継がれたことを付言しておきたい。この後継講座は9名の受講者を得て、アンケート結果も好評であった。また、この講座を機会として、詩人を顕彰する市民団体「宗左近・蕊の会」との連携の動きも生じている。その意味で、大黒家和洋文学講座学生レクチャーは、より幅広い地域連携への発展を準備した企画としても評価することができる。 【第2章第8節文責：小堀洋平】

2.9. 『『相州兵乱記』「小弓義明ト合戦ノ事」現代語訳×国府台歴史散歩マップ』(PBL、地域社会参画)

和洋女子大学が立地する市川市国府台付近で戦われた二度の国府台合戦についての共同研究&教育プロジェクトを実施した。

今回のプロジェクトでは、第一次国府台合戦(天文7年)を描いた軍記物語『相州兵乱記』に収められている「小弓義明ト合戦ノ事」を現代語訳し、国府台付近の史跡等に関する「歴史散歩マップ」を加えた小冊子を作成し、地域の小・中学校や社会教育施設を中心として広く配布することを目標とした。

経過としては、2022年度の前期授業「日本語の表現Ⅰ」(担当教員:梅山聡)および「表現特殊演習Ⅰ」(担当教員:小野真嗣)の2科目を、本プロジェクトのための共同授業として設定した。全15週の授業のうち、最初の2回分および最後の2回分を、両クラス合同の授業とし、最初の2回で、国府台合戦に関する歴史的知識を学習するための講義を小野が行った。その後の11週分の授業では、両クラスに分かれてそれぞれの担当する作業を行った。最後の2回はふたたび合同授業とし、両クラスの学生によるグループごとの作業報告が行われた。

「日本語の表現Ⅰ」の授業(梅山担当)では、市川市史に翻刻されている原文をテキストとして用い、古文で書かれている文章を履修学生とともに現代語訳する作業に取り組んだ。学生はいくつかのグループに分かれて、グループ内で相談しつつ、分担した箇所の翻訳を進めた。訳文の作成にあたっては、単なる現代語訳ではなく、小学校高学年程度の読者を想定し、年少の読者にも読みやすく理解しやすい訳文を作成することをこころがけた。また、「表現特殊演習Ⅰ」(小野担当)では、履修学生は、現代語訳テキストに添える挿絵・地図・人物相関図などを作成する班と、文学散歩マップ作成のための現地踏査(フィールドワーク)を行う班に分かれて、分担して作業を進めた。前期授業の終了後、学生が作成した原稿すべてを、教員2名および学科スタッフがチェックし、添削と修正を加えた上で最終的な訳文を完成した。

2022年度末に、現代語訳テキスト、挿絵、「歴史散歩マップ」をあわせて収録した小冊子『『相州兵乱記』(小弓義明ト合戦ノ事)——現代語訳×国府台歴史散歩マップ』(2023年3月15日)を完成し、発行することができた【図13】。約3,000部を印刷し、学内学生および、地域の学校への配布を行い、申し込みのあつ

た希望者にも郵送して配布するなどした。

小冊子発行後、プロジェクトの成果を地域住民に発信する取り組みとして、市川市の「大人の学び舎大黒家」で開催している和洋文学文化講座において、梅山・小野による講座「第一次国府台合戦を読む」を行った（2023年7月8日）。



【図13】『『相州兵乱記』現代語訳』小冊子

今後の計画として、地域の小中学生などを対象に、小冊子を活用した地域歴史散歩や史跡めぐりのイベントを行うことを考えている。また、国府台合戦に関する軍記物の研究&現代語訳プロジェクトを今後も継続し、別の軍記物語を現代語訳して、第2弾の小冊子を作成することも計画している。

【第2章第9節文責：梅山聡】

3. おわりに

3.1. 本教育振興プログラムの全体成果

第2章で報告した各プロジェクト以外にも以下の取り組みを行った。

- ① わようまんがビエンナーレ
- ② 書道専修卒業制作展「第46回 雁鴻会書展」・「第47回 雁鴻会書展」
- ③ 文化芸術専修卒業制作展
- ④ 大川内夏樹氏（九州共立大学）講演会「宗左近の詩と土地の名前」開催
- ⑤ DESIGN FESTA Vol.56への出展
- ⑥ 宮野源太郎氏（市川駅南口図書館長）講演会「駅南図書館長トーク」開催

④の文学研究者・大川内夏樹氏を招聘してZoom形式で開催した講演会「宗左近の詩と土地の名前」は、「市川の文学」テーマの一環として、⑥の市川駅南口図書館長宮野源太郎氏の講演会「駅南図書館長トーク」は、本教育振興プログラムに多大な協力をいただいた宮野氏に本プログラムとの関わりや図書館の業務について、学生および一般市民にも開かれた学術的なコミュニケーションの場を設けるために実施したものであるが、その他の取り組みは従来から各専攻単位で実施していたものである。これらの取り組みを本教育振興プログラムの一環として把握することにより、前述したようにこれまで本学科で各専攻や各教員による個別の取り組みに一任されてきたものが、学科全体でそれぞれの取り組みの成果を事後的に測定して共有し、教育改善へとフィードバックする仕組みの構築への第一歩となったと言える。

また、第2章で報告した各プロジェクトに学生たちが参画することにより、以下の成果があった。

- ・地域社会の公共機関と協働する経験、社会の課題に対して共同で解決策を考え実行する経験、特定ターゲットに向けた効果的なプレゼンテーションを、文章と視覚的表現の双方を組み合わせ工夫する経験を学生たちにもたらしることができた。
- ・ZoomやSlackなど、デジタルの情報共有ツールを活用するスキルとリテラシーも涵養できた。
- ・翻案小説執筆と学生作品集制作により、授業での学修内容を自らの表現へと応用すること、読者を意識して表現物を制作することを実践できた。
- ・「自分の好きなこと、得意なこと」を表現し、地域社会に向けて発信し、第三者の評価や感謝を得ることで、学生たちの自信と自己効力感を高めることができた。

これらは、本プログラムの取り組み後に期待される効果として、第1章第2節で「取り組み後に期待される効果」として挙げた2点（体系化と制度化による学科全体の教育改善と、学生主体の活動による汎用的能力と自己効力感の涵養）に合致するものである。また、実際に経験することを通じて、自分たちの学修成果が社会においてどのような役割を果たすことが可能かを知る機会ともなった。これらは、本学科での解決すべき課題であった学生たちの意欲と学修効果の低迷、就職活動への出遅れと苦戦、就職後のミスマッチなどに対する対策として一定の効果を挙げると考えられる。

3.2. 本教育振興プログラムの課題と今後について

2020～2022年度は、COVID-19の影響が顕著であった期間であり、立案したものの実施できなかったプロジェクトが多数あった。この点については非常に残念である。また、COVID-19の影響によって、2020年度は書道専修卒業制作展「第46回 雁鴻会書展」が合同展示方式に切り替えられたり、文化芸術専修卒業制作展はオンライン展示に切り替えられたりした。また、例年参加していた「DESIGN FESTA」は2020・21年の2年間不参加となった。このような毎年行われてきた企画の中断は、それまで積み重ねてきたノウハウ継承の断絶につながる一方、マンネリ化しがちな展示手法に、新たな手法を取り入れる機会となることにつながった¹⁰。

また、今回のような取り組みは、効果が明確なかたちで現れるまでには一定の時間がかかると考えられる。大学での学修を活かす教育スキームは4年間単位で設計する必要があり、COVID-19の影響によって社会情勢が大きく変化していくなか、3年間で実施された本プログラムの本当の成果が現れるのは今しばらく時間が経過した後と言えるのではないだろうか。そのためにも、本プログラムを継承発展した取り組みを継続していく必要があると考える¹¹。

【第3章文責：小野真嗣】

註

- 1 ともすれば「虚学」とみなされがちな人文学・芸術系のカリキュラムをいかに社会連携と結びつけるか、また種々の批判や懐疑の声も上がり始めているPBLをいかに実効的に運用するかについては、以下の他大学での先行事例を参照した。同志社大学PBL推進支援センター『PBL導入のための手引き』https://ppsc.doshisha.ac.jp/attach/page/PPSC-PAGE-JA-9/56858/file/pblguidebook_2011.pdf [2023年8月12日閲覧]；愛知産業大学、椋山女学園大学、中部大学、豊橋創造大学、豊橋創造大学短期大学部、名古屋商科大学、三重大学で構成される「文部科学省 産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業 中部圏の地域・産業界との連携を通じた教育改革力の強化」東海Aチームによる『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック』<https://www.hedc.mie-u.ac.jp/pdf/ALShippaiJireiHandbook.pdf> [2023年8月12日閲覧]。また、「社会参画型芸術 (Socially Engaged Art)」についてはすでに膨大な事例と言説の蓄積があるなかで、大学という教育と研究の場が、芸術を通じていかに社会と相互関係を築きうるかについては、東京大学芸術創造連携研究機構 (略称ACUT、<https://www.art.c.u-tokyo.ac.jp>) [2023年8月12日閲覧] による、領域横断型の学知と教育と芸術実践の現場とをつなぐ実践も参考とした。
- 2 日本文学文化学科での学修の大部分は、人文学のディシプリン (文学・言語学・芸術学・歴史学研究) と芸術の実技制作で占められ、職業教育も教職と学芸員・司書課程が中心であるが、他方で大半の学生が卒業後に携わるのは、ビジネスの分野である。そこで

- は、商品を市場に流通させ利益を得ることが求められる。大学の学問と社会での職業実践との間に生じがちな「ギャップ」を架橋し、大学での学修成果を職業に結びつく実践知とするために、本プログラムではただ専門知や表現を社会に届けるのみにとどまらず、「マーケットと効果（利益）を想定し戦略を立てる」という要素も学生活動に組み込むこととした。この着想は、明治大学国際日本学部にてポピュラーカルチャーゼミを主宰する森川嘉一郎氏による実践、「作品制作にターゲット策定、マーケット調査、企画立案、広報宣伝、反響・成果のチェックというビジネスプロセスも組み込んだPBL」に触発されたものである（参照：森川嘉一郎（インタビュー）「展示、教育、アーカイブ——なぜ大学でのポップカルチャー教育に意味があるのか」、『サブカルチャー批評ZINE Merca β06』2018年、68-75ページ）。
- 3 このような状況は、日本の高等教育がユニヴァーサル・アクセス段階に突入した2000年代以降、とりわけ入試選抜度の低い大学に共通するものとなっているようだ。2010年の論文である居神浩「ノンエリート大学生に伝えるべきこと——「マージナル大学」の社会的意義」では、社会構造や労働という観点も含めて、非選抜型大学（「マージナル大学」）の抱える課題とそれへの提言が挙げられている。本教育振興プログラムは、非選抜型大学の人文学系学科という立場から、前述した問題の解決を模索した一事例として、他の類似する大学にとってのモデルケースとなりうることも企図して構想している。
 - 4 「大学生と図書館のコラボ企画 中高生にお薦めの本を手作りポップで紹介」、『ちいき新聞』市川版2021年4月9日号；【市川市】和洋女子大学の学生たちが中高生お薦めの本を手作りポップで紹介」、『チイコミ！』（ちいき新聞ウェブ版）2021年4月12日：<https://www2.chiicomi.com/press/1686068/> [2023年8月12日閲覧]；「和洋女子大の学生有志が“書店”風に 中高生に読んでほしい本を紹介 29日まで 市川駅南口図書館とコラボ展」、『市川よみうり』2021年4月10日号。
 - 5 <https://wayo-sereal.wixsite.com/home>
 - 6 https://twitter.com/wayo_sereal
 - 7 https://www.instagram.com/wayo_sereal/
 - 8 オリジナルのデザインを紙や布地に印刷することのできる孔版の技術。今回の企画では、学生が参加者のターゲット層をリサーチした上で、およそ30種類程度のデザインを用意した。来場者はその中から希望のデザインと印刷する素材（トートバック及びTシャツ）、インクのカラーを選び、刷る作業過程を体験してもらう。
 - 9 本学科の「かつうら朝空マーケット」への参加は、その後も2023年6月11日、2023年10月8日と継続して行われている。「かつうら朝空マーケット」参加及び「DESIGN FESTA」出展については、小野真嗣・松崎夏実「博物館学教育における課外活動実践とその成果」（『明治大学学芸員養成課程紀要』第34号、2023年）参照。
 - 10 例えば、文化芸術専修卒業制作展はCOVID-19のためオンライン展示に切り替え、学生の自主的な企画・立案により、作品展示用ウェブサイトと作品説明アニメーション動画を制作し好評を得たため、2021年度以降も会場とオンライン展示の両方を実施している。詳細については、小野真嗣・松崎夏実「オンライン展示における実践教育とその効果」（『明治大学学芸員養成課程紀要』第33号、2022年）参照。
 - 11 2022年10月より大学コンソーシアム市川産官学連携プラットフォーム協議会共同研究事業「共生のための文化芸術プログラム（ACCS = Art and Culture for Convivial Society）」（研究代表者：小野真嗣）を取得し、研究を継続している。

小澤 京子（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授）
 佐藤 淳一（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）
 間淵 洋子（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）
 吉井美弥子（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 教授）
 松崎 夏実（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 学科付職員）
 吉山さやか（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 助教）
 小堀 洋平（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）
 梅山 聡（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）
 小野 真嗣（和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授）

（2023年11月14日受理）